怪盗御殿のお嬢さん

空論

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
怪盗御殿のお嬢さん

【Ｎコード】
Ｎ５２４１ＢＡ

【作者名】
空論

【あらすじ】
奇妙な予告状とともに現れた、伝説の怪盗の弟子を名乗る変な少年の物語

プロローグ

かつて、『怪盗P』と呼ばれる泥棒がいた。
国中の警察、そして名だたる探偵達にその影すら掴ませなかった、犯罪史上最大級の怪物。
盗み出された美術品や宝石類は数知れず、被害総額は当時の額で数百億とも数千億とも言われている。
その正体は一切不明。ある目撃者は老練な紳士だったと話すが、別の目撃者はごく普通の若者だったと熱弁する。
中には、年端もいかぬ無邪気な少女だったなどと言う者までいた。
どんな姿をしているのか、それ以前に年齢や性別さえわからなかったのだ。
唯一わかっていたのは、犯行前に送られる予告状に添えられた『怪盗P』という名前だけ。
しかしその『P』という文字が何を示すのか、由来についてはやはり誰一人知る者はいなかった。

この怪盗は、盗人にも関わらず民衆からは比較的好意的な注目を集めていた。
正体不明の怪盗、という響きにはそれだけで好奇心をそそるものがあるし、連日紙面を賑わしていたから注目されるのは当然ではある。
だが、理由はそれ以外にもあった。
一つは、尻馬に乗って部数を伸ばそうとしたマスコミ各社が幾重にも脚色を積み重ねた結果、「巨悪に立ち向かう孤高の義賊」という虚像が出来あがってしまっていたこと。
そしてもう一つは、いわば怪盗自身が時折見せた奇行にあった。
実はこの怪盗、時々おかしなものに狙いを定めることがあったのだ。

例えば、昼間のデパートで稼働しているレジスター。生放送中のアナウンサーが握っているマイク。国会開幕中の議員の靴一足。さらには昼間の公園をまるごと盗み出すなどということもあった。
金銭的な価値がそれほどあるとも思えず、難易度だけはやたら高い。
そういった誰もが首を捻るようなものをいとも容易く盗んでみせたのである。
はっきり言って意味がわからない。
しかし、犯行自体はとんでもなく凄い。
おかしな奴。
おもしろい奴。
この奇行によって怪盗Pに「無邪気な道化師」というような印象を抱く者は少なくなかった。
巨悪に立ち向かう孤高の義賊にして、無邪気な道化師。――この組み合わせで世間の人気が得られないわけがない。
だからこそ人々は怪盗Pについての報道を池の鯉よろしく渇望し、その一挙手一投足に熱視線を送ったのである。

しかし、ある時期を境に怪盗は表舞台からぽったりと姿を消した。
何故現れなくなったのか。様々な憶測が流れた。
しかしいくら想像を巡らせたところで事実が変わることはない。
やがて紙面に怪盗Pの名が出ることもなくなり、人々の記憶からも次第に消えて行った。

そして、現在。
怪盗Pの消失から十数年経った今では、彼（若しくは彼女）のことを覚えている人間は殆どいない。
その正体も当然ながら謎のままである。

1―1

ことの発端は、郵便受けに入っていた一通の封筒だった。
「……なにこれ」
買い物から帰ってきた小泉さつきは、その封筒を手に取り怪訝な顔をした。
白色の無地の封筒だった。
文字通り、無地の封筒。差出人の名前どころか、ここの住所や宛名さえも書かれていない。
封だけはしっかりされていて、どうやら中には紙が入っているようだ。
一体誰が送ってきたのかしら。
というか、よく届いたわねこんなの。
さつきはしばらく胡散臭げに封筒を裏返したりしていたが、
「まあいいか。危険な物ってわけでもなさそうだし」
中身がなんなのかはわからないが、叔母に渡しておけば問題ないだろう。
正直な話、この手の奇妙なものが届くのには慣れている。
これまでの経験から考えるに、どうせ変わり者が送ってきた叔母へのファンレターとかそんなオチだろうし。
そんなことを考えながら封筒をポケットにしまうと、さつきは買い物袋を片手に屋敷へ入って行った。

R市の南東、高台に位置した森林の中央にぽつんと構えた一軒の屋敷。
さつきが入って行ったこの屋敷は、とある事情から通称『怪盗御殿』と呼ばれている。
別に怪盗が住んでいるわけではないし、怪盗が盗んだ金銀財宝によって建てた屋敷、というわけでもない。

にも関わらず、どうして怪盗御殿なんて大層な名前で呼ばれているのかというと……まあ、その辺の事情はまた後で説明するとして、まずは少女の紹介をしておこう。

小泉さつきは先月十五才になったばかり。黒ぶち眼鏡に腰ほどまである長い黒髪をもち、肌の露出の少ないどちらかと言えば地味な服装をしている。

どこか小動物を思わせる丸い目の可愛らしい顔立ちをしているが、感情をあまり表に出さないタイプで、殆ど表情にも変化がない。

そのためか、薄暗い部屋に置かれた人形めいたというか、どこか近寄りがたい、冷たそうな印象を抱かせる。

愛想笑いの一つでもしてみれば相当見違えるはずなのだが、あいにく本人にその気はないらしい。

「ただいま」

さつきは玄関を閉めながら呟くように言った。

返事はない。多分聞こえてもいないのだろう。

この屋敷の住人はさつきと叔母の二人だけだから、広さからいっても返事が返ってくるほうが珍しいのである。

「さてと……」

と、さつきは広間の柱時計を見上げながら軽く息をついた。

思ったより帰りが遅くなってしまった。早く夕ご飯の用意をしないといけない。

今日はそれなりに凝ったものに挑戦しようと思ってたけれど、妥協して手軽に済ませてしまおうかしら。

さつきは足早に台所へ向かいながら、買い物袋の中身と台所に残っている食材とを頭の中に思い浮かべた。

さて、これらの材料で早くできてそれなりに美味しいもの、というと……。

自分のレパートリーやや最近食べた物やら考慮しながら献立を組んでいく。

いつもならば台所へ辿り着く前に何を作るか決まるので、すぐ調

理に取り掛かれるのだ。
しかし、この日はそうではなかった。
――きゃあああぁぁぁ……。
「……」
さつきは立ち止まり、振り返った。
微かにだが、確かに悲鳴が聞こえた。上の階からだ。
「叔母さん……？」
何かあったのかしら。
少し迷ったが、さつきは声のしたほうへ向かうことにした。
玄関広間を左に抜け、階段を上る。そこから直進して角を右へ。
そこに叔母の書斎がある。
「叔母さん！　何かあったの？」
書斎に入って呼びかけるが姿はない。人がいた形跡もないし、ここではないようだ。
となると……。
さつきは書斎を飛び出した。
廊下の角をもう一つ曲がると、資料置き場に使っている部屋があるのだ。
さっきの声の聞こえ方から考えて書斎でないならあそこしかない。
予想通り、資料置き場で間違いないようだった。
普段なら鍵が掛けられているはずの扉が開けっぱなしにされ、照明も点いている。
「おばさん、いるの？」
さつきは警戒しながら室内へ踏み込んだ。
そして、奥のほうへ目をやり――そのまま固まった。
本棚から書類が一冊残らず床に落とされ、大きな山を作っていた。
その山の天辺から、一本の腕が飛び出している。
その指にはめられた指輪に、さつきは見覚えがあった。

叔母がいつも嵌めている指輪だ。
「あれは……」
さつきはポツリと呟き、ほとんど棒立ちで本の山を見つめた。
――そんなさつきの背後、開け放たれたままの扉が音もなく動き、別の人間が姿を現した。
扉の陰に息を潜めて、さつきに隙ができるのをずっと待っていたのである。
その人物はさつきの背後へ歩み寄ると、手にした凶器を後頭部目がけて振り下ろした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5241ba/

怪盗御殿のお嬢さん

2012年1月14日15時48分発行